
『うごめく影』【掌編・ミステリ】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『うごめく影』 【掌編・ミステリ】

【Nコード】

N4268P

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

暗闇を恐れるようになったのは13歳の時だった。うごめく闇を恐れて初めて電気をつけて眠りについた。

夜の闇だけと置いていたけど、それは大きな間違いだった。闇ではなく影だった。

何時までも逃げ続けた。けれど私は捕まった。

見ず知らずの男は下卑た笑いを浮かべながら私の話を聞いていた。どうなるかも知らずに…。

『うごめく影』 作：山田文公社

私が小学校から中学校にあがり、秋の始まりが13歳の誕生日だった。私はそれまでは幽霊やお化けは信じてなく暗闇は怖く無かった、けどあの日から私は暗闇を、暗い影を恐れるようになった。

あの日私はお祝いのプレゼントが本当に楽しくて、なんだか眠るのがもつたない気分だった。だからいつもよりも長く居間でテレビと本を交互に見て過ごし、いつもより遅い夜の11時を過ぎ母から叱られ、仕方なく眠る支度をしてから自室へと向かった。

私は扉を開けるといつもすぐに扉の脇にある電気スイッチへ手を伸ばすのだけど、扉を開けた瞬間暗闇が生き物ようにうごめいているのを見た。私はあまりの出来事に声を失い、しばらくうごめく様子を見ていた。夜の海や川のように暗闇が波打つてうごめいていて、それは私に気づいたように波紋を広げながら近付いて来たので、慌てて電気スイッチを付けた。

あまりに突然の出来事だったから、私は何が起きたのか理解できなかった。電灯に照らされた部屋はいつもと同じ部屋でも異常はない。何か夢でも見たのかも知れないと思ったのだけれど、すぐにそれが夢でないと知ることになった。しばらく本を読んでけど、まぶたが重くなりスタンドライトを付けて部屋の電気を消した瞬間、先ほどまで影を潜めていた闇がうごめきだしたのだ。

スタンドライトを避けるようい闇がうねりながた波紋を広げていた。眠たさは一瞬にして吹き飛んだ。見開いた目が閉じられなかつ

た。暗闇は先ほど見た時よりも力強く波紋を広げながらうごめいている。やがて暗闇は形を整え始めてやがて人の形をとった。陰鬱そのな髪のながい女性がこちらを見る瞬間に私は部屋の電気をつけた。明るい天井にはうごめくものは何も無かった。

私はあまりの怖さに一晩中明かりをつけて寝た。なれない事をしたせいから学校で一日中眠かった。眠かったせいでろくでも無い仕事を先生から言いつけられた。それは体育館での椅子を出して並べる事だった。本当は係の子がいるんだけど風邪を引いて休んでいるので、私が代わりに選ばれたのだ。少なくとも居眠りしなければこんな事にはならなかった。

椅子を並べる係の人は明らかに少なかった。係の子が言うには各クラスにふたりいるはずだけど、体育館にはたったの五人しかいなかった。仕方なく舞台の下の椅子のある場所を引っ張った瞬間、あの隙間から漏れる暗闇がうごめき、影が伸びて私に触れようとしたので、思わず引っ張っていた手を離して尻餅を着いた。

尻餅をついた私はしばらく放心していた。他の係の子が口々に何か言っているけど私には聞こえていなかった。夢だと思った暗闇が夜だけの出来事ではなく、こんな昼間の暗い影でも起きるの事を知り呆然とした。私は立ち上がり体育館から逃げ出すようにして走って逃げ出した。空が青く澄み渡るほど晴れた空の下を走った。誰かの影が目に残る、それはわずかではあるけどうごめいていた。振り返ると私の影も少しだけうごめいていた。

それから私は明かりをつけて眠るようになった。そして暗闇を恐れるようになった。中学、高校みんな恋愛やおしゃれを楽しむなか、私ひとり暗闇から逃れる事ばかり考えていた。でも上手く逃れていた。多少人付き合いに問題は抱えたけれど、それなりの学校生活を

過すごしていた。

けれど何時までも逃れる事はできなかった。ある日風が強くて暑い時に部屋の電気が全て消えた。うごめく闇の中で私は狂ったように叫んだ。闇のうねりが肌に触れ、体を締め上げるように絡みついてきた。私は叫び続けたが誰にも声は届かなかった。やがて暗闇は叫んでいる私の口から中へと入り込んできた。

「そうして闇が私を蝕んだの」

「へえ、じゃあ今は君の中にいるんだ」

ベッドの中で私の隣に寝ている見ず知らずの男はそう言った。

「信じてないのね、なら見せてあげる」

「ああ、じゃあ是非見せてくれ」

そう言い男にまたがると、私はじつと男の目を見た。最初は下卑た笑いを浮かべていたが、やがてその顔に恐怖が浮かび情けない声で叫び始めた。私は叫んでいる男の口を私の口で塞いだ。私の中から闇が男の口へと流れ込んでいく。男は私を引きはがそうと抵抗していたが、やがて力を失い力尽きた。

「ほら、これであなたも…」

私は部屋の明かりを全て消した。うごめく影が部屋を埋め尽くしていた。次なる獲物を求めて…。

(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268p/>

『うごめく影』【掌編・ミステリ】

2010年12月18日22時58分発行